

# 介護以前の親子関係における精神的自立が介護にあたる影響 —母娘介護の受容に注目して—<sup>1), 2), 3)</sup>

馬場 絢子\*

## The Impact of Parent-child Psychological Independence before Caregiving on Caregiving —Focusing on Acceptance of Mother-daughter Caregiving—

Ayako BABA\*

This study aimed to examine the influence of parent-child psychological independence on care burden through acceptance of care. Five hundred thirty-four adult children, who were caring for, or had cared for their parents at home, completed the scales. In analysis one, the acceptance of care scale data was analyzed using factor analysis and confirmed reliability and validity. In analysis two, data were analyzed using a path analysis with multiple group structural equation modeling to identify the relationship between parent-child psychological independence, the acceptance of care, and care burden, and the care dyad difference between the models. Analysis one showed three factors of the acceptance of care scale: 'confusion and resistance,' 'resignation and hope,' 'active understanding.' This scale had internal consistency and validity. Analysis two illustrated that 'reliable relationship with a parent' affected 'resignation and hope' and 'active understanding,' and that 'confusion and resistance' and 'active understanding' affected care burden. It was also suggested that dementia affected 'confusion and resistance' in mother-daughter caregiving. Implications for mental support for caregivers were discussed.

**key words:** acceptance of care, parent-child caregiving, mother-daughter caregiving, development of scale, parent-child psychology independence

### 問題と目的

内閣府(2018)によると、介護者の25.2%が同居配偶者、21.8%が同居子、9.7%が同居している子の配偶

者であるという。別居子による介護も想定すれば、親子介護の割合はさらに高まると考えられる。

介護においては介護する人とされる人との関係が様々な影響を及ぼすことが示されているが(馬場,

<sup>1)</sup> 本研究は、JSPS 科研費 JP17J09291 の助成を受けて実施された。

<sup>2)</sup> 本研究は、The Gerontological Society of America 2019 Annual Scientific Meeting で発表した内容の一部に加筆修正を行ったものであり、博士論文(東京大学教育学研究科臨床心理学コース)に含まれる。

<sup>3)</sup> 本論文の執筆にあたりご指導・ご助言くださった東京大学教育学研究科の高橋美保教授、調査実施にあたりご協力くださいました介護者・介護経験者の皆様に感謝の意を表します。

\* 東京大学

The University of Tokyo, 7-3-1 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo 113-0033, Japan

2019a), 親子介護においては特に長期的な介護者—要介護者関係, すなわち介護以前からの親子関係の文脈が重要である。というも, 親子介護では, 高齢になった親が子どもに愛着行動を向けることになる。介護は養育と類似の機能を満たす営みであるという指摘をふまえれば (Allen & Walker, 1992), これは親子の力関係や責任関係における逆転・交替を意味していると解釈できる (Colin, 1996)。介護者や要介護者の愛着スタイルと介護負担やストレスとの関連を明らかにした研究の蓄積から, 不安定な愛着関係は介護者の負担感やストレスとして表れ, 安定した愛着関係がこれを緩和している様子がうかがえる (e.g. Cicirelli, 1993; Crispi, Schiaffino, & Berman, 1997; Karantzas, Evans, & Foddy, 2010; Magai & Cohen, 1998; 菅沼, 2002)。しかし実際の親子関係と親子介護との関係はより複雑である。すなわち, ポジティブな関係性のもとに行われる介護が負担を伴わないわけでは決してなく, ポジティブな関係においてこそ健康な親イメージの喪失に伴う葛藤が生じることもある (天谷・大塚・島田・星野・青木, 2002)。中でも母娘介護においては, 密接な血縁関係ゆえに目の前の認知症状態の母親と長年の記憶の中の母親とのギャップが大きいことや (石本・筒井・伊賀原, 2008; 福岡・原, 2004), 特有の情緒の関係性により母親の認知症発症を否認するといった現象も報告されている (横瀬, 2009)。こうした中で馬場 (2019b) は質的研究により, 娘による老いゆく母親介護の受容プロセスにパターンを見出し, これが介護以前からの母娘関係における精神的自立の影響を受けることを示した。高齢社会を支える介護者の思いに寄り添った心理的支援を展開するためには, 介護負担のみならず介護の受容や意味づけといった複雑な体験理解が肝要である。

しかし, 介護以前からの親子関係における精神的自立が実親介護の受容におよぼす影響について量的に明らかにした研究はほぼ見当たらない。そもそも, 介護の受容に関する日本語の尺度としては, 鈴木・谷口・浅川 (2004) による「介護の意味づけ」の下位尺度として「受容型」が存在する。しかしこれは意味づけの一類型であり, 意味づけ自体が困難であるパターンも含めた検討には不向きである上に, 妥当性も検証されていない。なお「介護の意味づけ」は「昔の人間関係」との関連が示されているが, この「昔の

人間関係」というのは疎遠か親密かを測定する一次的な変数であり自立的な側面は含まれておらず, 介護以前からの親子関係を測定する指標としては不十分である。

このように, 現状実親介護の受容の量的把握には限界があり, 介護以前からの親子関係における精神的自立との関連は検討されていない。そこで本研究は, まず分析1として実親介護の受容に関する尺度を作成し, 分析2としてこの尺度を用いて介護以前からの親子関係における精神的自立および介護負担との関連を明らかにすることを目的とした。殊更母娘介護においては介護以前からの近い親子関係の影響が示されてきていることをふまえ, 母娘介護とその他の親子介護を比較し, 母娘介護の特性についても示唆を得ることを目指した。分析2の仮説は以下の2つであった。

**仮説1** 介護以前からの親子関係において精神的に自立しているほど, 実親介護の受容度が高い

**仮説2** 実親介護の受容度が高いほど, 介護負担が低い

## 方 法

### 調査方法

2019年1月～5月にweb調査を実施した。対象者条件は、「要支援もしくは要介護認定を受けた実親を主に在宅介護している, もしくはしていた経験のある人」とした。調査はクラウドソーシングサービスを通じて行い, 得られた885件の回答から重複や不備のあった回答を除外した534件を分析対象とした。

なお本研究は所属機関倫理審査専門委員会の承認を得て実施した。協力者に対しては, 回答フォームの表紙に調査の倫理的配慮に関する説明を載せ, データは統計的に処理され, 個人が特定される形で利用されることはないこと, 協力したくない場合はその意志が尊重されること, 回答をもって協力に同意したものとみなすこと等を説明した。

### 質問紙の構成

**フェイスシート** 項目は, 年齢, 性別, 配偶者の有無, 子どもの有無, 介護者の状況, 介護相手, 介護時期, 介護年数 (在宅・自宅外), 居住形態, 家族の関与, 要介護者状況 (年齢・要介護度・認知症の有無), 介護サービス利用状況, 経済状況, であった。

**親子関係における精神的自立尺度** 介護以前から

の親子関係への認識を測定するため、11項目5件法の「親子関係における精神的自立尺度」(水本, 2018)を一部表現を変えて使用した。具体的には、介護を始める前の関係について回答するように教示し、項目の表現を全て過去形に修正した。この尺度を採用したのは、下位尺度として「親からの心理的分離」と「親との信頼関係」との両側面を扱っているためであった。

**実親介護受容尺度原案** 介護の意味づけ・受容の状況を把握するため、「抵抗」「意味づけ」「受容」「切り離し」を想定し(馬場, 2019b), 「介護の意味づけ」(鈴木・谷口・浅川, 2004), 「家族介護者対処スタイル」(翠川, 1993), 「痴呆性高齢者、介護そのものに対する態度」(中原, 2005)などを参考にしながら39項目を作成し、これを実親介護受容尺度原案とした。次の質問について、「以下の項目が介護中のあなた自身にどのくらい当てはまるかについて、『全くあてはまらない』から『非常にあてはまる』までのうち、最も適切なもの1つにチェックしてください」という教示を行い、選択肢は「全くあてはまらない」「あまりあてはまらない」「どちらともいえない」「ややあてはまる」「非常にあてはまる」の5件法を採用した。

**介護の意味づけ** (鈴木他, 2004) 実親介護受容尺度の収束的妥当性を確認する目的で選定した、18項目4件法の尺度である。「介護の意味づけ」は受容型・自己成長型・環境拘束型・囲い込み型・互惠型の5つの因子から構成される。このうち受容型と実親介護受容の「受容」、互惠型と「意味づけ」との間に正の相関が想定された。

**行動指標** 実親介護受容尺度の収束的妥当性を確認する目的で作成した。①「介護以前にはしなかったような(他人に対するような・子どもに対するような、など)言葉遣いで親と接する」、②「親の加齢による言動について、親を叱りつけたことがある」という2項目について、「全くない」「あまりない」「たまにある」「よくある」の4件法で回答を得た。

このうち①と実親介護受容の「切り離し」、②と「抵抗」との間に正の相関が想定された。

**バランス型社会的望ましさ反応尺度日本語版** (谷, 2008) 実親介護受容尺度の弁別的妥当性を確認する目的で選定した、24項目7件法の尺度である。バランス型社会的望ましさ(以下、BIDR-J)と実親介護受容の各因子との間には相関が見られないこと

が想定された。

**Zarit 介護負担尺度日本語版短縮版** (荒井・田宮・矢野, 2003) 介護負担の測定を目的に選定した8項目5件法の尺度である。この尺度を採用したのは、介護負担感について少ない項目で測定することができ、介護研究においてもっとも広く使われている介護負担尺度の1つであるためであった。

**K6 日本語版** (Furukawa et al., 2008) 精緻な分析を行うために統制変数としてモデルに投入することを意図し、選定した6項目5件法の尺度である。この尺度を採用したのは、少ない項目で精神的健康度を測定できるためであった。以下、K6とする。

### 分析方法

**分析1** 先に回答を得たサンプル1( $n=265$ )を用いて探索的因子分析を行った。因子数はMAP基準を参照して決定し、次のいずれかの基準に該当する項目を削除する手続きを繰り返した。(a)最も高い因子負荷が.40未満の項目、(b)最も高い因子負荷と2番目に高い因子負荷の絶対値差が.20以上の項目、(c)複数の項目に.40以上の因子負荷をもつ項目。続いて回答を得たサンプル2( $n=269$ )を用いて確認的因子分析を行なった。なお、分布や統計量からサンプル1・2には大きな差がないことを確認した。

以上の手続きで得られた尺度について、それぞれ尺度全体および因子毎の $\omega$ 係数を算出して信頼性を確認した。さらに各因子についてSEMを用いて妥当性尺度との相関係数 $r$ を算出し、妥当性を検討した。

最後に、作成した尺度およびその他の尺度について、因子内和得点を従属変数、介護組み合わせ(母娘・母息子・父娘・父息子)を独立変数とした分散分析を行なった。

**分析2** サンプル1・2を用いて、親子関係における精神的自立尺度・実親介護受容尺度・Zarit 介護負担尺度日本語版短縮版の各因子について最尤法による確認的因子分析によりパラメータを求め、その推定値を用いて因子得点を算出した。多重共線性を確認した上で、親子関係における精神的自立尺度の各因子が実親介護受容尺度の各因子にそれぞれ影響を及ぼす仮説1および、実親介護受容尺度の各因子が介護負担感にそれぞれ影響を及ぼす仮説2について、パス解析により検討した。なおパス解析は、母娘介護グループとその他の親子介護グループの2群に

Table 1 研究対象者の属性

対象者（介護者）の属性	
年齢	平均 45.94 歳 ( $SD=9.47$ )
性別	男性 153 名 (28.65%), 女性 381 名 (71.35%)
配偶者の有無	有 341 名 (63.86%), 無 193 名 (36.14%)
子どもの有無	有 314 名 (58.80%), (うち同居する子ども有 251 名), 無 220 名 (41.20%)
要支援・要介護認定を受けている	20 名 (3.75%)
障害者手帳を持っている	28 名 (5.24%)
心身の不調を抱えており, 定期的に通院している	74 名 (13.86%)
育児をしている	121 名 (22.66%)
仕事をしている	370 名 (69.29%) (うち, 正社員 155 名, 契約/嘱託社員 51 名, パートタイマー 106 名, アルバイター 30 名, 派遣社員 14 名)
複数の介護を経験	282 名 (52.81%)
介護組み合わせ	
	母娘介護 241 名 (45.13%), 母息子介護 78 名 (14.61%), 父娘介護 140 名 (26.22%), 父息子介護 75 名 (14.04%)
要介護者の属性	
年齢	平均 76.71 歳 ( $SD=7.42$ )
要介護度	要支援 1 38 名 (7.12%), 要支援 2 63 名 (11.80%), 要介護 1 95 名 (17.79%), 要介護 2 107 名 (20.04%), 要介護 3 106 名 (19.85%), 要介護 4 70 名 (13.11%), 要介護 5 51 名 (9.55%)
認知症	疑いなし 215 名 (40.26%), 診断はないが疑いあり 167 名 (31.27%), アルツハイマー型 92 名 (17.23%), 血管性 25 名 (4.68%), レビー小体型 10 名 (1.87%), 前頭側頭型 8 名 (1.50%)
介護形態	
介護時期	現在 265 (49.63%), かつて 260 (48.69%)
介護年数	平均 4.40 年 ( $SD=4.02$ ) うち在宅介護年数平均 3.73 年 ( $SD=3.93$ )
居住形態	同居 312 名 (58.43%), 別居 213 名 (39.89%) (うち別の家族と同居 149 名)
別居の場合の距離	近居 (30 分以内で行き来可能) 121 名, 行き来に 30 分以上かかるが同じ都道府県内 54 名, 都道府県は異なるが同じ地方 27 名, 遠居 (異なる地方) 25 名
家族の関与	自分だけが介護している 137 名 (25.66%), 主な介護者ではあるが協力的な家族がいる 202 名 (37.83%), 家族と平等に介護を分担している 84 名 (15.73%), 主に介護している家族に協力している 107 名 (20.04%)
介護サービスの利用状況	訪問型 242 名 (45.32%), 通所型 316 名 (59.18%), 施設滞在型 160 名 (29.96%), 組み合わせ型 40 名 (7.49%), 福祉用具 242 名 (45.32%)
経済状況 (5 件法)	平均 3.23 ( $SD=1.24$ )

よる多母集団同時分析 (配置不変) として行った。さらにグループ間でのパス係数差について検定統計量  $z$  を確認し, グループ間でのモデル差を検討した。

以上の分析は R (3.4.1) を用いて行った。探索的因子分析には psych (1.8.12) (Revelle, 2018) を用い, 因子抽出方法として最小残差法, 回転法としてプロマックス回転を採用した。確認的因子分析・SEM には lavaan (0.5.23.1097) (Yves, 2012) を用い, 因子得点の算出には lavPredict 関数を使用した。多重共線性の確認には car (2.1.5) (John, & Sanford, 2011) を使用した。

## 結 果

### 対象者の属性

対象者 534 名の属性を Table 1 に示した。

### 分析 1 実親介護受容尺度の作成

探索的因子分析の結果, 20 項目 3 因子構造が抽出された (Table 2)。その項目内容から, 第 1 因子を「混乱と抵抗」, 第 2 因子を「諦めと願望」, 第 3 因子を「積極的意味づけ」と名付けた。このモデルの適合度は  $CFI=.800$ ,  $AGFI=.959$ ,  $RMSEA=.087$ ,  $SRMR=.090$  であり, 許容可能な範囲であると判断した。

内的整合性を検討するために  $\omega$  係数を算出したところ, 尺度全体では  $\omega=.80$ , 「混乱と抵抗」では  $\omega=.80$ , 「諦めと願望」では  $\omega=.82$ , 「積極的意味づ



Table 2 実親介護受容尺度の因子分析結果 (最小残差法・プロマックス回転)

項目内容	因子			共通性
	1	2	3	
第1因子 混乱と抵抗 ( $\omega = .80$ )				
以前の親とのギャップが辛い	.76	.11	.03	.57
以前できていたことができない親にいらだつ	.71	-.03	-.19	.55
親が壊れていくように感じる	.68	.10	-.01	.45
自分に介護される親を親として尊重するのに困難を感じる	.64	-.16	.04	.46
親が変わっていくのが認められない	.63	-.07	.09	.41
親のこれまでにはなかったような言動にショックを受ける	.59	.47	.07	.37
親に対して怒ってばかりいる	.53	-.07	-.05	.30
第2因子 諦めと願望 ( $\omega = .82$ )				
介護は自分の務めだと思う	.03	.89	-.13	.68
自分が親を介護するのは必然である	-.03	.85	-.07	.68
自分が親を介護するのは仕方ないことだと思う	.12	.67	-.09	.39
親は老いても親だと思う	-.12	.50	.10	.34
親には幸せに過ごして欲しいと思う	-.02	.49	.19	.38
第3因子 積極的意味づけ ( $\omega = .80$ )				
親のことを以前より理解できるようになる	-.15	-.09	.66	.40
介護をすることを通じて、親子の時間を過ごせている	-.19	.15	.61	.52
親の介護をできることは幸運だと思う	-.15	.11	.59	.45
老いたことでより本来の親らしいところがでてきたと思う	-.10	-.13	.58	.28
これまで知らなかった親の一面を知ることができる	.20	.09	.52	.37
親は人が老い死んでいくことを身をもって教えてくれるのだと思う	.13	.01	.47	.25
子どもを守るような気持ちで介護をする	.08	.14	.41	.25
介護は、親に頼らず自立する機会だと思う	.12	-.11	.41	.16
因子間相関	1	2	3	
	1	-.13	.02	
	2	—	.50	
	3		—	

け」では  $\omega = .80$  であった。

収束の妥当性については、介護の意味づけもしくは行動指標との相関係数により確認した。「混乱と抵抗」と行動指標2項目との相関係数はそれぞれ  $r = .565$ ,  $r = .348$ , 「諦めと願望」と受容型の介護の意味づけとの相関係数は  $r = .823$ , 「積極的意味づけ」と自己成長型・互惠型との相関係数はそれぞれ  $r = .566$ ,  $r = .752$  であった。

弁別的妥当性については、BIDR-J との相関係数により確認した。「混乱と抵抗」「諦めと願望」「積極的意味づけ」それぞれ  $r = -.126$ ,  $r = .047$ ,  $r = .110$  であった。

介護組み合わせ別に各尺度の因子内和得点を算出し、分散分析 ( $df = 3, 530$ ) を行なったところ、いずれの因子においても有意差は見られなかった (Table 3)。

## 分析2 介護以前の親子関係および介護負担との関連

**仮説1** 親子関係における精神的自立尺度の因子「親との信頼関係」「親からの心理的分離」がそれぞれ実親介護受容尺度の因子「混乱と抵抗」に対して負の影響を、「諦めと願望」「積極的意味づけ」に対して正の影響を持つモデルを仮定した。統制変数として家族の関与・要介護度・認知症の診断もしくは疑いの有無・介護時期(現在もしくは看取り済み)を投入した。

このモデルにおける VIF 統計量は全て 10 以下であり、最大値が 1.10 であったことから、多重共線性の問題は生じていないと判断した。パス解析の結果を Figure 1, 2 に示した。親子関係における精神的自立と統制変数を区別するため、前者を二重線の四角で、後者を単線の四角で囲んだ。グループ間の各パス係数に有意な差は見られなかった。

Table 3 介護組み合わせによる各尺度得点の分散分析

	全体 (n=534)		母娘 (n=241)		母息子 (n=78)		父娘 (n=140)		父息子 (n=75)		F 値	η <sup>2</sup>	p 値
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD			
親子関係における精神的自立													
親との信頼関係	20.65	4.19	20.30	4.54	20.72	3.67	20.86	4.21	21.33	3.28	1.36	0.01	0.26
親からの心理的分離	17.53	3.93	17.26	4.06	17.77	3.55	17.82	3.82	17.63	3.97	0.75	0.00	0.52
実親介護受容													
混乱と抵抗	20.22	5.77	20.78	5.98	20.45	4.81	19.26	5.73	19.95	5.79	2.16	0.01	0.09
諦めと願望	20.09	3.67	20.02	3.93	20.05	3.51	20.11	3.50	20.35	3.26	0.15	0.00	0.93
積極的意味づけ	25.91	5.68	25.95	5.84	25.77	5.31	26.23	5.72	25.33	5.40	0.42	0.00	0.74
介護負担	13.57	7.48	14.19	7.59	13.23	6.84	12.60	7.14	13.73	8.14	1.41	0.01	0.24
精神的健康	7.90	5.93	8.17	5.91	6.85	5.70	8.27	5.80	7.45	6.30	1.31	0.01	0.27

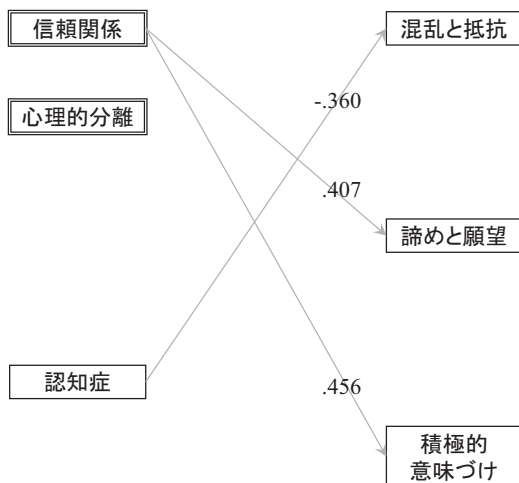


Figure 1 母娘介護グループにおける、介護以前からの親子関係と実親介護受容との関連モデル。統制変数として、家族の関与・要介護度・認知症の診断もしくは疑いの有無 (1：なし、0：あり)・介護時期 (1：現在, 0：看取り済み) を投入。

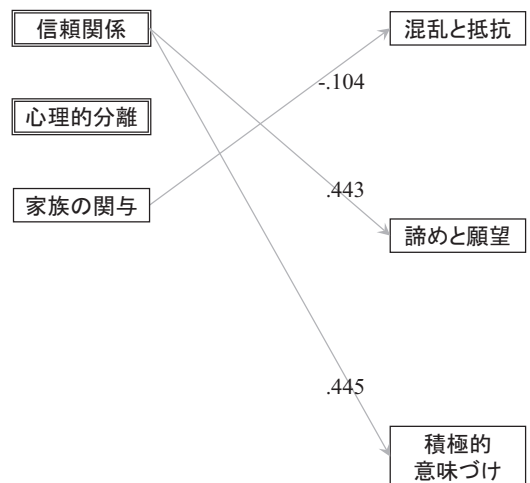


Figure 2 母息子・父娘・父息子介護グループにおける、介護以前からの親子関係と実親介護受容との関連モデル。統制変数として、家族の関与・要介護度・認知症の診断もしくは疑いの有無 (1：なし、0：あり)・介護時期 (1：現在, 0：看取り済み) を投入。

仮説 2 実親介護受容尺度の因子「混乱と抵抗」が介護負担に正の影響を、「諦めと願望」「積極的意味づけ」が負の影響を持つモデルを仮定した。統制変数として家族の関与・要介護度・認知症の診断もしくは疑いの有無・介護時期 (現在もしくは看取り済み)・K6・介護サービス (訪問型・通所型・施設型・組み合わせ型) 利用の有無を投入した。

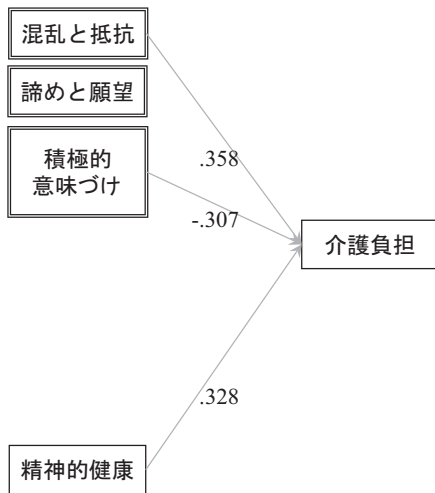
このモデルにおける VIF 統計量は全て 10 以下であり、最大値が 1.72 であったことから、多重共線性の問題は生じていないと判断した。パス解析の結果を Figure 3, 4 に示した。実親介護受容と統制変数

を区別するため、前者を二重線の四角で、後者を単線の四角で囲んだ。グループ間では「混乱と抵抗」から介護負担へのパスに有意差が見られた ( $z = -2.411, p = 0.008$ )。

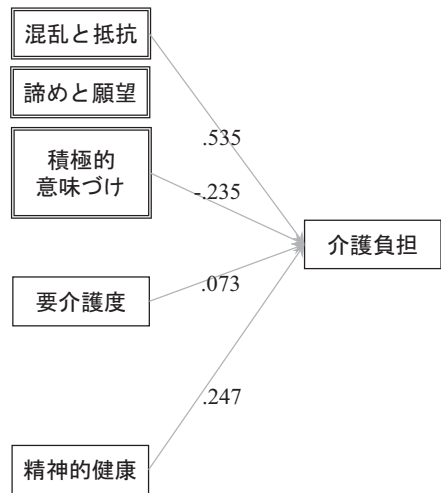
なお、仮説 1・2 とともに飽和モデルであったため、適合度は報告しなかった。Figure 1~4 では、5% 水準で有意なパスがひかれた統制変数のみ図示した。

### 考 察

本研究では、分析 1 として実親介護の受容パター



**Figure 3** 母娘介護グループにおける、実親介護受容と介護負担との関連モデル。  
統制変数として、家族の関与・要介護度・認知症の診断もしくは疑いの有無 (1:なし、0:あり)・介護時期 (1:現在, 0:看取り済み)・介護サービス (訪問・通所・入居・組み合わせ) の利用 (ダミー変数) を投入。



**Figure 4** 母息子・父娘・父息子介護グループにおける、実親介護受容と介護負担との関連モデル。  
統制変数として、家族の関与・要介護度・認知症の診断もしくは疑いの有無 (1:なし、0:あり)・介護時期 (1:現在, 0:看取り済み)・介護サービス (訪問・通所・入居・組み合わせ) の利用 (ダミー変数) を投入。

ンを量的に把握可能な尺度を作成した。混乱と抵抗・諦めと願望・積極的意味づけの3因子について、信頼性および妥当性を確認できた。

この尺度を用いた分析2では、介護以前の親子関係が部分的に実親介護受容と関連し、実親介護受容が部分的に介護負担と関連することが示唆された。

**実親介護受容尺度の構成**

実親介護受容尺度は、原案作成時に想定していた因子「抵抗」「切り離し」が混乱と抵抗に、「受容」が諦めと願望に、意味づけが「積極的意味づけ」にまとまった。混乱と抵抗・諦めと願望・積極的意味づけともに  $\omega$  係数の値から信頼性は十分であると判断した。

混乱と抵抗は「抵抗」および「切り離し」を想定した行動指標と一定の相関が得られた。諦めと願望・意味づけは、それぞれ介護の意味づけの受容型および自己成長型・互惠型と高い相関が得られた。またいずれの因子も BIDR-J との相関は低かった。これにより一定の収束的妥当性・弁別的妥当性を備えた尺度が作成されたと判断した。

**介護以前の親子関係と実親介護受容**

母娘介護グループ、母息子・父娘・父息子介護グループともに信頼関係から諦めと願望・積極的意味

づけへ正の有意なパスがひかれた。よって、仮説1は部分的に支持された。このことから、親と信頼関係を結べていると感じている介護者は、介護を受容しやすいと考えられた。

心理的分離から介護受容の各因子へのパスがひかれなかった原因としては、心理的分離が自記式尺度において反映されづらい概念であり、量的に把握しきれない可能性も考えられた。

親子関係における精神的自立の各因子から介護受容における混乱と抵抗へのパスがひかれなかった原因としては、混乱と抵抗の多義性も考えられた。この因子は、親からの心理的分離が低いために生じる否認、信頼関係を結んでこられなかった親を世話する苛立ちなどの多様な受けとめがたさを複合しており、親子関係における精神的自立と線形的な関係性がない可能性が考えられた。

**母娘介護の特徴** 統制変数に注目してみると、母娘介護グループでは認知症の診断もしくは疑いの有無、母息子・父娘・父息子介護グループでは家族の関与と混乱と抵抗との間に有意なパスがひかれた。このことから、母親を介護する娘にとっては、家族の関与といった実質的な協力の質量よりも、認知症により母親イメージが変容することのほうが抵抗感に

つながりやすいと考えられた。母娘特有の情緒的で密接な関係ゆえにイメージ変容のギャップが大きく、抵抗が生じたものと解釈した。

### 実親介護受容と介護負担

母娘介護グループ、母息子・父娘・父息子介護グループともに混乱と抵抗から介護負担へ正の有意なパスが、積極の意味づけから介護負担へ負の有意なパスがひかれた。よって、仮説2は部分的に支持された。このことから、親の介護を受容している介護者は介護に対して感じる負担が低い傾向が示された。

実親介護受容の因子である諦めと願望から介護負担感へ有意なパスがひかれなかった理由としては、願望を自認する過程で諦めねばならなかった、親や介護への複雑な思いの存在が考えられた。

**母娘介護の特徴** 母娘介護グループにおける混乱と抵抗から介護負担への影響は、その他の親子介護グループと比して低かった。このことから、母娘介護においては混乱や抵抗が負担感として自覚されづらい可能性が示された。

### 介護者支援への示唆

以上の知見から、実親介護受容の支援について2つの示唆を得ることができた。1つ目は、カウンセリングや内観療法などを通じて介護以前からの親子関係を見直し、信頼関係を高めるような関係調整を行うことであった。これにより、介護を積極的に意味づけたり諦めたりすることにつながるものが期待された。2つ目は、母娘介護においては認知症に関する心理教育、その他の親子介護においては家族の関与を促進する協力的体制の構築やコミュニケーションをサポートすることであった。これにより、介護への混乱や抵抗が軽減すると考えられた。

### 限界と課題

本研究の限界として、まずデータに回顧的な内容が含まれることが挙げられる。得られたデータはあくまで回答時点から振り返っての評定にすぎないことを考慮しなければならない。次に、データの等質性にも限界があった。具体的には、要介護状況や認知症度、介護への関与度等については統制変数としてモデルに投入することとし、限定しなかった。3つ目の限界は、データの偏りであった。心身に負担をかけかねない質問紙調査への回答・協力を得られたという点で、介護に積極的である、現時点において切迫した介護状況ではない、親子関係について研究者に開示

することができる、といった偏りをもつことも考えられた。得られた結果を一般化する際には、その範囲に留意する必要がある。4つ目の限界は、web調査によるデータの質のばらつきであった。manipulation checkを行なったが、不適切なデータを除外しきれしていない可能性があった。

今後はこれらの限界をふまえ、データ収集方法の工夫や対象の拡充が必要である。

### 引用文献

- Allen, K. R., & Walker, A. J. 1992 Attentive Love: A Feminist Perspective on the Caregiving of Adult Daughters. *Family Relations*, **41**(3), 284-289.
- 天谷真奈美・大塚真理子・島田広美・星野純子・青木由美恵 2002 痴呆性高齢者を介護する娘介護者の危機 埼玉県立大学紀要, **4**, 87-93.
- 荒井由美子・田宮菜奈子・矢野栄二 2003 Zarit 介護負担尺度日本語版の短縮版 (J-ZBI\_8) の作成：その信頼性と妥当性に関する検討 日本老年医学会雑誌, **40**(5), 497-503.
- 馬場絢子 2019a 家族介護における介護者-被介護者関係に関する研究の動向 東京大学大学院教育学研究科紀要, **58**, 217-225.
- 馬場絢子 2019b 老いゆく母親を介護する娘の意味づけに関する質的研究 心理臨床学研究, **37**(3), 248-258.
- Cicirelli, V. G. 1993 Attachment and obligation as daughters' motives for caregiving behavior and subsequent effect on subjective burden. *Psychology and Aging*, **8**(2), 144-155.
- Colin, V. L. 1996 *Human attachment*. New York, NY, US: McGraw-Hill.
- Crispi, E. L., Schiaffino, K., & Berman, W. H. 1997 The Contribution of Attachment to Burden in Adult Children of Institutionalized Parents With Dementia. *The Gerontologist*, **37**(1), 52-60.
- 福岡理英・原 祥子 2004 痴呆高齢者介護者の介護肯定化プロセスとその関連要因-「母娘」のケア・ストーリー 日本看護学会論文集 地域看護, **35**, 45-47.
- Furukawa, T. A., Kawakami, N., Saitoh, M., Ono, Y., Nakane, Y., Nakamura, Y., Tachimori, H., Iwata, N., Uda, H., Nakane, H., Watanabe, M., Naganuma, Y., Hata, Y., Kobayashi, M., Miyake, Y., Takeshima, T., & Kikkawa, T. 2008 The performance of the Japanese version of the K6 and K10 in the World Mental Health Survey Japan. *International Journal of Methods in Psychiatric Research*, **17**(3), 152-158.
- 石本智枝・筒井千津子・伊賀原由香 2008 認知症の母を介護する娘の精神的負担 日本看護学会論文集 地域看護, **39**, 63-65.



- Fox, J., & Weisberg, S. 2011 *An {R} Companion to Applied Regression*. Second Edition, Thousand Oaks CA: Sage, URL: <http://socserv.socsci.mcmaster.ca/jfox/Books/Companion>.
- Karantzas, G. C., Evans, L., & Foddy, M. 2010 The role of attachment in current and future parent caregiving. *Journals of Gerontology - Series B Psychological Sciences and Social Sciences*, **65B**(5), 573-580.
- Magai, C., & Cohen, C. I. 1998 Attachment Style and Emotion Regulation in Dementia Patients and their Relation to Caregiver Burden. *The Journals of Gerontology: Series B*, **53B**(3), 147-154.
- 翠川純子 1993 在宅障害老人の家族介護者の対処（コーピング）に関する研究 社会老年学, (37), 16-26.
- Morse, J. Q., Shaffer, D. R., Williamson, G. M., Dooley, K. W., & Schulz, R. 2012 Models of self and others and their relation to positive and negative caregiving responses. *Psychology and Aging*, **27**(1), 211-218.
- 内閣府 2018 平成 30 年版高齢社会白書（概要版）第 1 章 高齢化の状況（第 2 節 2）([https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2018/html/gaiyou/s1\\_2\\_2.html](https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2018/html/gaiyou/s1_2_2.html)).
- 中原 純 2005 痴呆性高齢者の家族介護における負担感-介護者の態度と介護状況を通して 高齢者のケアと行動科学, **10**(2), 71-76.
- Revelle, W 2018 *psych: Procedures for Personality and Psychological Research*. Evanston, Illinois, USA: Northwestern University, URL: <https://CRAN.R-project.org/package=psychVersion=1.8.12>.
- 菅沼真樹 2002 愛着理論から見た老年期 東京大学大学院教育学研究科紀要, **41**, 311-317.
- 鈴木規子・谷口幸一・浅川達人 2004 在宅高齢者の介護をになう女性介護者の「介護の意味づけ」の構成概念と規定要因の検討 老年社会科学, **26**(1), 68-77.
- 谷 伊織 2008 バランス型社会的望ましき反応尺度日本語版（BIDR-J）の作成と信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究, **17**(1), 18-28.
- 横瀬利枝子 2009 介護施設利用に到るプロセスへの一考察：認知症の母親と娘の関係性の視点から 生命倫理, **19**(1), 60-70.
- Rosseel, Y. 2012 lavaan: An R Package for Structural Equation Modeling. *Journal of Statistical Software*, **48** (2), 1-36. URL: <https://www.jstatsoft.org/article/view/v048i02>.

(受稿: 2019.9.30; 受理: 2019.12.4)